

## 高良とみの家庭科学研究所とその教育についての 卒業生に対する聞き取り－2

The Interview on The Tokyo Domestic Science Research  
Institute (1933 – 1935) coordinated by KOURA Tomi and  
Its Education to Its Graduates – 2

倉 元 綾 子

KURAMOTO Ayako

(Received October 1st, 1998)

This is the first interview on the Tokyo Domestic Science Research Institute(1933 - 1935) and its education to its graduates.

On June 2nd, 1997, Professor SUZUKI Toshiko and I have done the interview to the graduates from the Institute, which was coordinated by Dr. KOURA Tomi.

In part 2, I described its teachers, the education and the lives of graduates leaving after the Institute.

### Key Words:

家政学史 history of home economics, 家政学教育 home economics education, インタビュー interview

### 解 説

本稿は、戦前から戦後にかけて平和運動や女性運動に関わった高良とみが校長であった家庭科学研究所とその卒業生たちに対して、1997年6月におこなった聞き取り調査の主要部分の記録である。家庭科学研究所は1933年（昭和8年）高良とみを校長として設置された。

パート2では、家庭科学研究所の教員とその教育の続き、家庭科学研究所を出てからの卒業生の生活について記した。

### 1. 家庭科学研究所の教員とその教育－2

江里口 : 自由学園にも見学に行きましたね。

林 : そうでしたね。羽仁もと子先生がまだご健在だったんですね。

江里口 : 何でしたか、「懺悔」してましたよね。

森安ほか: アッハッハッハ。

真木 : そうですね。いつもね、小学校でも生活ルームというのがありましてね。「〇〇さんは、今日××したんですけど、どうしたんですか?!」というのが、まず来るわけです。

留美子 : あれは、もう摘発だよ、もう... 「問題にする」と称して、ね。「お掃除の時間に、○  
○さんと△△さんはおしゃべりしていましたが、どうしたんですか?!」などというのです。

真木 : 必ず、「どうしたんですか?!」って来るんですよ。

立入 : そんな学校、入りたくないわね。

留美子 : あれは、いじめに通じるところがありましたね。

森安 : 自由学園というのはちょっと完璧主義のところがありましたね。そうすると、かえって  
伸びないのですね。

留美子 : 禁欲的というか、寮生活なんかでは、朝5時から起きて、それから本を読んではいけ  
ない、先生の言った本しか読んではいけない、「雑本」を読んではいけない。それが一番困りま  
したね。

真木 : 小学校から10分単位で毎日時間をつけていく。

留美子 : 無駄っていうものがないのよ。

真木 : 合理的というのでは、すごく合理的でね。

森安 : 私は、ミセス羽仁の後輩なのですね。婦人の友の会に入ったり、子どもたちも自由学園  
の子どもの音楽教室にも入れました。あれはよかったですね。絶対音を教えたりしてね。生活団  
に入れて、「パッと起き」とか、「パッと寝」とかね、皆やりました。いいところもあるけれども、  
あまりに完璧主義でね。着るものなども3枚持っていればいいというのですね。3枚ずつ、一つ  
干しておいて、一つ着て、余分が1枚あればいい、というのね。私は卒業は東京の府立第一高等  
女学校です。羽仁先生はその1回生です。

真木 : しかし、本当に息苦しいところがありましたね。

留美子 : 朝起きて、顔洗って、布団をたたむのに、何分何秒かかったかというのをクラスで競争  
させたりしました。一番早いのは、1分とか2分とかいうのもいましたが、いったいそれが何な  
んだという感じね。

森安 : 友の会などでも本当に完璧主義で、エンゲル係数を毎月出させる、それを逆算すると、  
だいたい収入がわかってしまうのです、あれはちょっとどうだったでしょうか。

真木・留美子 : 美術教育、音楽教育はよかったですね。美術は山本鼎<sup>1)</sup>、吉岡堅二<sup>2)</sup>、佐藤忠  
良<sup>3)</sup>、本郷新さん<sup>4)</sup>などが教えていて、楽しかった。

---

<sup>1)</sup>1882-1946 (明治15-昭和21) 大正期の美術教育者、画家。愛知県生まれ。1907石井柏亭らと美術雑誌『方寸』創刊。日本創作版画協会、日本版画協会創立の立役者。日本近代版画の確立と普及に尽力。1920長野県上田近郊に日本農民美術研究所設立。自由画運動を提唱。

<sup>2)</sup>1896-1990 (明治29-平成2) 昭和期の日本画家。東京生れ。父は日本画の吉岡華堂。野田九浦に師事。新日本画研究会。1926帝展発入選。1948「創造美術」(のち新制作協会日本画部)結成。1959-1969東京芸大教授。(現代物故者事典1988-1990, p.684, 日外アソシエーツ, 東京 [1993])

<sup>3)</sup>1912- (明治45- ) 昭和期の彫刻家。宮城県生れ。1939新制作派協会彫刻部創設。具象系作家。「群馬の人」,「うづくまる裸婦」,「カンカン帽」など。

<sup>4)</sup>1905-1980 (明治38-昭和55) 昭和期の彫刻家。北海道生れ。1939佐藤忠良らと新制作派協会彫刻部創設。「わだつみのこえ」,「氷雪の門」など。

森安 : 絶対音を小さいときに教えてくれたのは良かったと思います。なかなか他ではそういうものはありませんでした。園田高弘さん<sup>5)</sup>のおとうさんの書いた本に、幼稚園か小学校2年くらいまででなければ絶対音を覚えないからと言っています。飛行機が上を飛んでいると、何メートル先にいるか、音でみんなわかるのですね、絶対音を知っていれば。しかし、そういう人は当時なかなかいなかったもので、海軍、陸軍に何とかして来てくれと言われたようですね。私たちはオーケストラを聴いても「ああ、いいな」という程度でよくはわからなかった。だから、子どもたちには皆絶対音を習わせました。今はもう、あたりまえですけど。

真木 : それは、もう昭和ですが、まだ大正デモクラシーの名残があったようですね。

留美子 : その中で自由学園なども存在していた。

森安 : 玉川学園<sup>6)</sup>、明星学園<sup>7)</sup>など少し自由主義の学校<sup>8)</sup>がね。

立入 : 戦前の明星学園はよかったですね。

森安 : なにか理想を持っていた。

立入 : うちの夫の妹の娘、姪は幼稚園から桐朋だった。中学までは成績はなかった。

林 : 小原国芳先生の玉川学園には一晩、泊めていただきました。

森安 : お客様のお部屋がありましたね。 .

林 : キャンプファイヤーみたいなのをしましたね。2年目の方も入学されてから行きました。

森安 : ホームに山やいろいろなものがありましたね。

---

<sup>5)</sup>1928— (昭和3— ) 戦後のピアニスト。東京生れ。戦後はじめて国際舞台に進出した日本人器楽独奏家の草分けの一人。

<sup>6)</sup>東京都町田市にある総合学園。1929小原国芳創設。「全人教育」実現を目標として塾教育、労作教育ならびに芸術教育を軸に、個性尊重、自学自律などの学風をつくる。国際的新教育運動とのつながりで、デンマーク体操などをとり入れ、教育界に新風をふきこんだ。現在は幼稚部から大学院までを擁する総合学園。玉川学園土地部は学園都市の形成に寄与、出版部は児童むけの百科事典などを編集、出版。(中野光:世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.)

<sup>7)</sup>1924赤井米吉により東京井の頭に創設。生産活動や労働を含んだ独自の教育課程を編成。赤井米吉:1887—1974 (明治20—昭和49) 大正・昭和期の教育家。石川県生れ。パーカスト草案のドルトン・プランを日本に紹介。大正期の教授法確信に影響。(太田孝子:日本人名大事典現代, p.5, 平凡社, 東京 [1979] による.)

<sup>8)</sup>自由教育:近代における自由教育は、政治的権力の統制や教会勢力などの干渉をしりぞけ、子どもの自発性や自己活動、ならびに教師の自由を尊重する教育を意味する。日本の自由民権運動での自由教育は教育への権力統制を排除しようとするものだった。大正期には、たとえば山本鼎の自由画教育の提唱や土田杏村を指導者とする自由大学の運動があった。羽仁もと子の自由学園(1921)、西村伊作の文化学院(1921)、池袋児童の村小学校(1924)などがある。子どもの自発性や自己活動を尊重して教育改造をおしすすめることがめざされた。第2次大戦後の「新教育」理論・実践も、戦前の「自由教育」の系譜をひく。教育における「自由」の本義は、それが人間の理性的な自己決定を保障するところにある。したがって、教育の実際においても「自由」がゆたかな成果をうみ出すことが必要である。(中野光:世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.)

江里口 : 上野陽一先生<sup>9)</sup>の家にも行きました。産業能率大学の前身ですね。先生には証券取引所に連れていってもらったこともあります。

森安 : 上野先生という方は面白い方でした。電話のかけ方など、いろんなことを教わりました。

立入 : お宅にうかがって、実際にご自分が使っている便利なものを皆教えてくださいました。

森安 : カナモジカイ<sup>10)</sup>の会員でね。

江里口 : 金槌は金槌の絵の描いてあるところに置くとかね。

森安 : 皆、そういう風にきちんとできていました。他のところにやるとわからなくなるから、絵のところに置くようになっていました。

立入 : 大変勉強になりました。

森安 : 上野先生も合理的なことを教えてくださいましたね。電話のかけ方などを教えてくださいました。今のように長電話などしません。用件だけを言うのです。あらかじめ、ちゃんと書いておいて用件だけを言ってパッと切るという風なことをね。

林 : 上野陽一先生は世田谷に能率研究所を持っておられました。不思議なご縁があって、私と主人が昭和三十四年に会社の経営の角度を変えて少し盛りあげようと思ひまして、紹介状をもらって、アメリカ合州国のあちこちを五十日ばかり回ったのです。そのときに上野先生の能率研究所に行ってご指導を受けました。「えらい先生がいた」と言って家に帰ってきました。そこで、「上野陽一先生なら私が学校で習いましたよ」と言いましたら、主人は「ヘエーッ」と言っていましたよ。意外なところにご縁があるものですね。

森安 : 私も上野先生の本を持っているかもしれない。『家庭なんか…』というような名前のね。薄い本で、ブルーの表紙のものでした。

江里口 : 私の娘の連れ合いも何やら貿易対策のことで講座などを受けています。そこで、上野陽一先生の能率研究所の話などを盛んにするのは。それで、「あらー、私の先生だ」って、よく話しをするんですよ。

林 : 実業界で、ありきたりでなく、もう少し目を出さそうと思って工夫した人は、上野陽一先生の能率研究所の門をたたいているのですよ。一緒にアメリカの視察旅行などをしたりして

---

<sup>9)</sup>1883-1957 (明治16-昭和32) 産業心理学者。産業能率研究所長、大蔵省作業部計画課長、日本能率学校理事長、立教大学経済学部長、産業能率短期大学理事長兼学長。大正半ばにアメリカで盛んになった能率研究に着目、研究。日本の産業心理学の先駆者。(松本恒之: 日本人名大事典現代, p.108, 平凡社, 東京 [1979] による.)

<sup>10)</sup>漢字を使用している限り日本語の文字改革と言語改革は成功しないと見る考えから現れた会。仮名は50字を学習すれば足りる、仮名による表記はローマ字100字の文を57字ですませる、仮名タイプの熟練者は普通の人の話をそのままタイプできる、仮名は日本語の音節構造に適した文字、語の複合・連濁の関係などもよくわかる、日本語はまず第1に1億の日本人のためのもの、日本語に適した文字を用いることが最も必要、仮名は日本でくふう案出された、とする。(大野晋: 世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.)

ね。実際に能率研究所を見学させていただきました。人数が少なかったからできたことです。幸せなことですね。

森安 : お二階で皆が見学してお話をうかがっていると、インタホンみたいなのを使得、「お茶とお菓子を持ってきてください」とかやっておられました。あの頃、そういう装置をつけているところは他になかったのではないのでしょうか。60年くらい前のことですからね。

立入 : 「鬼足袋」にも行きました。工場に行って、「女の人が働いているところを見なさい」ということでしたね。

森安 : 足袋を作っているところです。

林 : 私が覚えているのは、「鬼足袋」でできた足袋と銀座のみようが屋（足袋の専門店）に行って足型を採ってもらって作る足袋とでは値段がずいぶん違うということでした。鬼足袋屋さんは10銭か15銭、みようが屋さんは2円か3円とかで、高いということなどを知りました。家庭経済の話ですね。

江里口 : それと簿記の初歩を教わりましたね。

林 : 貸方、借方ね。

江里口 : それも、おナスをもらったらいくらですかといったようなでしたね。

林 : 複式簿記などを上野先生から教わりましたね。

皆 : そうそうそう。

立入 : 横浜の外国人でコーベル先生とおっしゃる方のお宅にうかがってティー・パーティなどをしていただきましたね。

森安 : コーベル先生はユダヤ系でした。ご夫妻は戦争中に官憲に殺されました。

林 : ティー・パーティにうかがった時は家庭科学研究所の2年目で、1年生と2年生が一緒でしたね。

森安 : お庭があってね。お嬢さんとお坊ちゃんの目の前でご夫妻がピストルで殺されてしまったのです。コーベル先生のご家族のその後について高良先生にうかがったら、お嬢さんはしかし、日本人を怨むことなく、「日本とアメリカ?の架け橋になります」と言っておられるとのことでした。「偉い方ですよ」と高良先生がおっしゃっていました。

林 : 立派な洗濯機、冷蔵庫もありましたね。

真木 : 先ほど言っておられたように、母が自由学園だとか、足袋の工場だとかに皆様を見学に連れていったというのは、大変おもしろいですね。父の従兄弟で、今、東大の理論物理学をやっている人がいますが、彼が大学に入るために東京に出てきたときに、どういうわけだか、日本銀行に連れていったそうです。そこで、日本銀行の大きな金庫か何かを見せたそうです。それで、父の従兄弟は「だいぶ気が大きくなった」ということでした。とにかく、何かそういうところはおもしろいですね。

江里口 : 私たちも日本銀行へは行きましたよ。大きな金庫のところに。

真木 : そういう社会見学が花嫁学校と違うところですね。

林 : 教えていただいたことは、あの頃流行りはじめた花嫁学校とは一味違っていました。そのことが大変うれしかったですね。

留美子 : 戦後は、私たちも新聞社に行ったり、劇やお能を見に連れていってくれたりしました。戦争中はそういうことはありませんでしたね。

江里口 : それから、麴町の万平ホテルに行きました。

林 : ええ、ええ。

江里口 : 中国人のコックさんのお料理現場を見学しました。モヤシの根むしり、切株のまな板、大きな料理包丁にびっくりしました。

林 : 高良先生のご実家の和田様のお宅にお邪魔させていただいたこともあります。歩いて行けるようなところにありました。畑にいろいろ新しい野菜や、いちごを作っていた。それで、その畑の一隅にお勝手から出る残菜を入れて肥料にするような有機肥料の設備がありました。それは、「本当に、なるほどなあ」と思って見ました。自分でいちごのジャムや缶詰めをお作りになったのを拝見したのでしたね。先生が関東学院大や東大などのセツルメントに連れていってくださったりもしました。

江里口 : 江東の吉見静枝さんという方のセツルメントにも行きましたね。

森安 : 高良先生と一緒に、大島だったか、八丈島だったかの身障者の施設に行ったでしょ。私は行かなかったけど。

林 : 高良先生だったか、稲葉先生だったかもしれません。紀元節の前の日にたちばな丸に乗って、ひどい嵐のなかを行きました。しかし、着いたら晴れました。その大島では、もちろん三原山に登って見物しました。目的は、あそこにあった藤倉学園という精神薄弱児の寮へ行くことでした。

真木 : 今でもあるのではないですか。

林 : 今でもありますか。

立入 : あると思います。藤倉学園のチャリティ・ショーに二度ぐらい行ったことがありますから。

森安 : 骨がないような人がいたって、松本さんが言ってらした。

林 : 藤倉という華族が資金を出して、そのお嬢さんを入れるための施設として有料で一ヶ月60円費用がかかるころでした。稲葉先生が、「私の月給じゃそういう子どもができて、とても入れられません」と笑って言うておられました。本当におとぎの国のようなきれいな学園でした。そして、紀元節なのに三原山が暖かくてとても良かったです。保母やら、栄養士さんやら、少しずつおられて、至れり尽くせりの職員が揃っていました。家庭に置けないお子さん、お嬢さんばかりでしたが。

森安 : それから、自称芦原将軍、松沢病院<sup>11)</sup>というところにも行ったでしょう。精神科の病院。

---

<sup>11)</sup>日本の代表的な公立精神病院。東京都立。現存する最古の公立精神病院。1875養育院（東京府の窮民収容施設）内に設置された狂人室を前身とし、1879東京府癲狂院として独立。1901東大教授呉秀三が医長となる。患者の開放的処遇を進め、作業療法を導入、看護面を改革、服務規則をつくる。1904呉院長が欧米に劣らぬ病院建設を企図。1919松沢に移転、開放的処遇推進。現在も名実ともに精神科の診療と研究の中心的存在。（加藤伸勝：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による。）

- 林 : 市立の松沢病院。ああいうのは、心理学の勉強で行きましたね。
- 森安 : 軽症の人は皆、中で働いていました。お食事の片づけとかね。女の人が興奮すると、お風呂に入れる。1日中お風呂に入っている、そういう療法で入っていました。気味が悪かったですね。その他にも、いろいろな人がいました。壁に張りついている人や、近づいてきてポケットに手紙を入れる人がいました。その手紙には、「自分は困っているから出してくれ」と書いてありました。やはり、少し精神を病んでいる人たちでした。
- 留美子 : 白十字の林間学校には行かれませんでしたか。
- 森安 : 林間学校は茅ヶ崎に行きました。
- 留美子 : 私はあそこに入れられてしまいました。六才くらいのとき。母はそういう施設が好きでしたね。人を入れるのは良くありません。(ハハハ) 肺門リンパ腺か、なんかになったときでした。今は国立か、公立の施設になっています。
- 森安 : 井口愛子さん<sup>12)</sup>、井口基成さん<sup>13)</sup>の妹さん、もあそこに入れられたそうです。
- 留美子 : あそこの教育も最近興味を持っている人がいて、本にするとっています。
- 森安 : 家が別々になっているのでしょうか。食堂があって、食事は皆一緒に食べてね。
- 留美子 : 相模寮とか。
- 森安 : そこに保母さんがおられて、「お母さん」と呼んでいましたね、あの時。
- 留美子 : そうです。私、それが気に入りませんでした。「何がお母さんなんだ」と思っていました。熱のある子は、光寮に入れられました。教育としては悪くはありません。学校に三時間くらい行って、あとは寮にいます。しかし、とにかく子どもを家から離すというのは良くありません。本人の承諾なしに、そうするのは良くないと思います。最近、そういうことについてアンケートを取ったりしています。良かったという子もいるし、お母さんが二度目のお母さんでうまくいかなくて入れられたという子もいたし、精神的トラウマになったという人もいます。私も、良くない、と書きました。体には良かったかもしれませんが。
- 森安 : 私が覚えているのは、そのお母さんという人が細い糸でセーターを編んでいました。私は、自分の子でもないのに、よくそういう風にセーターを編んであげられるなあ、と感心していました。
- 林 : 稲葉先生は写真道楽でいらした。
- 森安 : 富士山ばかりね、たくさん。お上手でしたね。
- 林 : ナースリー・スクールの子どもの表情を、ご自身の論文に入れるのにたくさん撮っていらっしゃいました。先生が撮ってくださったのが、かなりたくさんありました。

---

<sup>12)</sup>1910–1984 (明治43–昭和59) 昭和期のピアニスト、ピアノ教育者。東京生れ。桐朋音楽大学教授。1974東京音楽大学教授。(日本女性人名辞典, p.71, 日本図書センター, 東京 [1993] による.)

<sup>13)</sup>1908–1983 (明治41–昭和58) 昭和期のピアニスト。東京生れ。井口愛子の兄。1935–1946東京音楽学校教授。1955桐朋学園大学長。

森安 : 富士山の写真も送っていただきました。展覧会するときも来ていただきました。

本当におもしろい方たちでした。楽しませていただきました。山に登ったりしました。私たちは谷川岳に登りました。遭難しかかりましたよ。医専の学生たちと一緒にでした。雨がザーザー降ってきまして、危なかった。先生が責任を感じられて、「今日は何でもしますから」とお膳を持ってこられたりしました。

林 : 新茶をごちそうになったこともあります。昔のことは、一度思い出すと次々と思い出されます。最近のことは、ついさっきのことでもケロリと忘れてしまうけれども。

鈴木 : 楽しんで勉強していらっしゃったんですね。

林 : 医専のお風呂に入りに行ったりしました。医専で慰安会というのがあるのに、二回くらい行きました。医専の寄宿舍から招待状が来て食事をごちそうになって、その後学生の方の日本舞踊やバイオリンなどの余興があって、とても楽しかったですね。医専との交流も、結構、高良先生が計らってくださっていました。試験がなくて、のどかでした。

留美子 : らいてうのころの日本女子大も試験はなかったそうですね。母のころはどうだったのかしら。

卒業のとき、試験なんか、あったのですか。

森安 : 「論文書け」と言われて、私は色彩学を書きました。教室に呼ばれてね。

留美子 : 卒業論文で色彩論をなさったの？

森安 : 色彩論をやるといってね。私、絵を描いていましたから。石井伯亭先生<sup>14)</sup>に女学校1年くらいからずっと教わっていました。そしたら、額田敏さんという写真を写す方のところに行きました。そうすると、横文字ばかりずらっとある。色彩学の本でもね。日本語の本なんか一つもないのです。これは困ったと思いました。

額田敏さんは、亡くなりましたね。額田晋さんのいところか何かですね。息子さんは今、定年になって病院に入っておられます。お嬢さん、お孫さんにこの間お会いしました。

真木 : そういう風に試験の代わりに論文を書かれたのですか。

森安 : 私は書かせられましたよ。

留美子 : 皆さんは卒業のときには何をされましたか。

林 : 私は卒業のときに高良先生にとってもお世話になりました。児童科といってもいわゆる保母の伝習所ではありません。それだから、どこでどう受けたのですか、先生が検定試験を受けるようにしていただきました。少し簡単な器楽と児童心理と幼児指導要綱の試験と、試験を三つほどして、保母の免許証をいただきました。

真木 : そのころ、保母の資格があったんですね。

林 : はい、そうですね。おそらく、高良先生が無理に通してくださったのでしょう。ナース

---

<sup>14)</sup>1882-1958 (明治15-昭和33) 明治・大正・昭和期の洋画家。東京生まれ。浅井忠に学び、二科会結成に参加。穏健な写実的画風、水彩画もよくした。



リー・スクールで実習をやっていたので、それを認めていただいたうえです。幼稚園むけの音楽が少しひけて、子どもの気持ちが分かるということから、検定試験を受けて免許をいただきました。

留美子 : 江里口さんは卒業のときには何かお書きになりましたか。

江里口 : 私は卒業の前に高良先生の紹介で小石川の保母伝習所に入りました。コロンビア大学でとみ先生とご一緒だった石原喜久先生が作られた保母伝習所に入って、そこで幼稚園の保母の免許をもらいました。ここでは上野陽一先生が心理学を教えておられました。卒業のとき、児童の玩具に関することを提出したように覚えています。

鈴木 : 花嫁修業と違う点はどういうところでしたか。

森安 : 人間として生活していくということ、男も女も自治をして生活していく、ということですね。

鈴木 : 花嫁修業というところはどういう風なものだったのでしょうか。

森安 : 和裁、洋裁、料理ですね。早く結婚していい奥さんになるという感じです。

立入 : 山脇女学校の場合は、お茶のお稽古、お行儀、水引のかけかた。そんなことを教えていました。

鈴木 : そうすると家庭科学研究所では、いい奥さんになるだけではなかったのですか。

森安 : 「世界を見てください」と言われました。「お鍋の底をピカピカに磨くことよりも、もっといろんなことに関心を持ちなさい」という教えでした。

倉元 : 視野が広いですね。

立入 : そう。視野は全然広がったわね。

江里口 : ちょっと、早かったんじゃないか（先進的）と思います。

皆 : うん、そうね。今の20年くらい前だとそういう学校も多いけど、あの頃ではちょっと早かったですね。

江里口 : 私が教えられたことがあります。雪がずいぶん降った年、2・26事件があった昭和11年のことでした。私はその時、井伊大老が殺された桜田門外の変の時も雪が降っていたそうなので、「大雪の時には変なもんです」と言った。そしたら、先生に「そんなものの考え方ではいけません。雪の降るのはあたりまえ、たまたまそれに事件が起こったんですよ」とおっしゃった。その時に私は、あーっと思いました。「ものごとを合理的に考えなくてはいけない」と思うようになりましたよ。

留美子 : 「科学」ということも言っていたみたいですね。女子大までは信仰の方が相当強かったようです。しかし、アメリカに行って科学を徹底的にやったので、考え方が変わってきたらしいです。アメリカ時代のノートにそう書いています。帰ってから、「女性は科学的にものを考えなければいけない」と盛んに発言していますね。

江里口 : 私が、「児童科なのに、なぜお料理をしなくちゃいけないんですか」と言ったら、「子どもの栄養のことをわからなくてはいけないから、お料理も必要だ」とおっしゃいました。着るも

のも必要だからということでした。

鈴木 : そうですね。

林 : 花嫁学校式に良妻賢母というふうな押しつけがましいところは全然なくて、生活の合理化ということを非常に強く打ち出していました。それが少し小生意気な年頃の娘には非常にすばらしい、と感じました。

立入 : 子どもに教えるという態度では本当になくて、婦人衛生学でも、科学のいろんなご本のことでも本当に子どもだと、馬鹿になさらなかった。私はその時最年少でした。山脇女学校を4年で卒業しましたから、17才でした。入った時は何もできなかったけれども、こんなにえらくなりました。本当に第一持ったことがなかったのです。母親が早くなくなりましたので、女中さん二人がついていました。そういう暮らしたから何もしたことがなかった。それが家庭科学研究所に入ったら、お昼のご飯は作らなければならぬし、いろいろやることになりました。

鈴木 : 高良先生の自伝でおもしろいと思ったのは、家庭科学研究所で生活科学を試み、そこで科学的な家庭教育を試みられました。「おかげで日本女子大の井上秀子先生<sup>15)</sup> ににらまれることになりました」というくだりですね(ハハハ)。

留美子 : 井上さんが学長になったのはいつでしょうか。母は井上さんとはもちろん女子大時代からの知り合いでしょうが、1910年、ワシントン会議があったとき、婦人矯風会の矢島楫子さん<sup>16)</sup> がいらして、母はその通訳をしました。その頃にあちらで井上さんとも会っています。その後、麻生正蔵校長<sup>17)</sup> と井上さんとの争いがありました。母は麻生さんを支持していました。井上さんが学長になったわけですが、その頃からうまくいかなかったのかもしれないね。友人への手紙の中に書いてあったのです。

鈴木 : 相当、そのころの一般的な家事科裁縫科とは違うようですね。その違いはどのようなも

---

<sup>15)</sup>井上秀(子) 1875-1963 (明治8-昭和38) 大正・昭和期の家政学者。兵庫県生れ。日本女子大学校第1回卒業生。1901櫻楓会幹事長。1908米国留学、コロンビア大、シカゴ大、のち英・独・仏遊歴。1910帰国、同大学校教授。1922日本婦人平和協会理事長、ワシントンでの世界婦人軍縮会議出席。1931日本女子大学校校長。同年、大日本青少年団副団長。戦後、公職追放。解除後、1951同校理事・評議員に復帰。1952大日本女子社会教育会会長。1956小田原女子短期大学学長。『最新家事提要』、『家庭経済提要』、『家事教育育児提要』。(日本女性人名辞典、p.122、日本図書センター、東京[1993]による。)

<sup>16)</sup>1833-1925 (天保4-大正14) 明治・大正期の女子教育家、婦人運動家。熊本県生れ。1880桜井女学校長。89女子学院長。1914までミッション系女学校の教育に尽力。1886東京基督教婦人矯風会設立。1893日本基督教婦人矯風会を組織し会頭。廃娼運動。1921渡米、ワシントン軍縮会議に日本婦人1万人署名の平和請願書を提出、世界平和にも尽力。(千野陽一:世界大百科事典。(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha、東京[1998]による。)

<sup>17)</sup>1864-1949 (元治1-昭和24) 教育家。大分県生れ。1894成瀬仁蔵に請われ日本女子大学校設立に尽力。1901開校と同時に学監。1919-1931校長。男女平等観に基づき、自我実現のための高度な教養の修得を婦人に求めた。1917『家庭教育の原理と実際』、1931『時代と民情に即したる家庭教育』。(中村元・武田清子:近代日本哲学思想家事典、p.11、東京書籍、東京[1982]による。)

のだったでしょうか。

江里口 : 私は、日本女子大にいたとき、玉成寮に入っていました。そこでは、福岡の方たちが、「シェンセイ、アソバシエ」などと言って、あそばせことばでした。

立入 : 私の友だちが日本女子大に入って、寮に入りました。上級生たちから厳しく「しつけ」られたというか、きまりが厳しくて、彼女は「とてもやっつけられない」というので、1年でやめて東京女子医専に入った人がいますよ。

留美子 : 平塚らいてうさんも、「成瀬先生の教をちゃんと身につけるために」と寮に入ったら、結構“成瀬教”の信者が多くて、井上秀さんが寮の舎監かなんかで、辛くて止めちゃったということでしたね。母も寮に入ったものの具合が悪くなったようで、ブラックマー・ホームに移っています。

井上秀さんは家政学の方でしたから。母が所謂家政学とは異なって、家庭科学研究所をやるというのにはいい気持ちはしなかったでしょうからね。家政学との教え方の違いはあったでしょうね。

森安 : 本当に独創的ですね。私たちは思っても実行できないけれど。

立入 : きっと家庭科学研究所では高良先生一番楽しんだんじゃないかしら。

皆 : 楽しかったでしょうね。

立入 : 自分でやりたいことを皆でやって、教えてね。あの時、楽しかったと思うわ。

林 : そういうことで、実地ですするというのは印象深いですね。

森安 : 織物もあったしね。

留美子 : そういうのはマン・ツー・マンの教育ですね。

鈴木 : 先生の方も、生徒さんの方も楽しんで勉強しあえるというのはすばらしいですね。今日のいろいろな教育問題を考える上で考えさせられます。教育の原点、みたいなものがあります。

立入 : 今になってみると、高良先生は若い女の人たちにいろんな可能性を見出したかったのではないかしら。

皆 : そうですね。

立入 : ご自分もしたかったのでしょうか。

留美子 : 若いときから広い視野を持ってもらいたかったのではないのでしょうか。

江里口 : なぜ学校がおしまいになったのかしら。わからないですね。

森安 : 資金難もありました。時代もありましたね。帝国女子医専の額田さんとは最初仲良かったですけど・・・。額田豊先生、理事長さんと先生はお親しかったようですよ。

立入 : 家庭科学研究所は生徒が少なくて経営が成り立たなかったようで、高良先生は私が2年生になる時には退かれました。

鈴木 : 3年目には家庭科学研究所の募集をやらないというのは皆さんにもお知らせがありましたか。

森安 : はい、違う学校になってしまいました。

立入　　：もう、名前まで変わったの。帝国女子高等学園になりました。後で来た先生は良妻賢母の宇野武夫先生でした。この方は長崎の生まれでした。私が2年になって卒業する時には、家庭科学研究所はなくなりました。

鈴木　　：そして、学校は校舎なども含めて、帝国女子高等学園に受け継がれていくのですね。

森安・立入：そうです。しかし、学校の性格は高良先生がお止めになってから、まったく変わりました。大政翼賛の体制<sup>18)</sup>の中に入っていました。宇野先生はコチコチの大政翼賛派でした。

森安　　：高良とみ先生は家庭科学研究所の次に佐藤新興生活館で活躍されましたね。

留美子　：今日は佐藤新興生活館の資料を持ってきました(「女子教育に於ける一つの試み」新教育研究<sup>19)</sup>，昭和12年2月号)。今の山の上ホテルの前身です。大野先生はのちに中央大学に行かれました。

森安　　：佐藤慶太郎さんは東京都美術館を寄付した人で、九州の炭坑主の資産家の方ですね。

立入　　：あそこにはいろいろなものがありました。上が宿舎になっていました。地方から、女の人たちが勉強に来ていたみたいですね。

## 2. 家庭科学研究所を出てから

林　　　：ともかく、やんちゃで、生意気で、ただ家庭に入ってお嫁さんになってしまうのが嫌でした。姉の家の近所にアメリカ合州国帰りの先生が新しいスタイルの幼稚園を始められたので、

---

<sup>18)</sup>大政翼賛会：日中戦争および太平洋戦争期の官製国民統合団体。国民の画一的組織化と戦争体制動員を企図。第2次近衛文麿内閣が1940/7月決定。全政党解散、10月結成。総裁は首相兼任(歴代総裁は近衛、東条英機、小磯国昭、鈴木貫太郎)。主導権は、当初近衛側近グループにあったが、1941内務官僚と警察が主導権を握る上意下達の行政補助機関となった。ついで東条内閣は、1942/1月実践部隊として大日本翼賛壮年団を結成、4月翼賛選挙を実施し翼賛議会体制を確立、6月大日本産業報国会・農業報国連盟・商業報国会・日本海運報国団・大日本婦人会・大日本青少年団の官製国民運動6団体を翼賛会傘下に統合、8月には部落会・町内会の会長を翼賛会の世話役に、隣保班長・隣組長を世話人とすることを決定。翼賛会と地方行政組織の一体化が完成し、天皇制ファシズム体制確立。1945/6月解散し、国民義勇隊へ発展的に解消。(木坂順一郎：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

<sup>19)</sup>新教育：限定した意味では、19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米教育界を中心におこった児童中心主義的な教育思潮とそれにもとづく教育改革の試み。1898フランスの教育改革者ドモラン(1852-1907)が『新教育』で、中等教育のカリキュラムの改革と生徒の自主的活動を重視すべきことを強調。同時期にイギリスの C. レディ、ドイツの H. リーツ、アメリカの J. デューイらによって新しい理論や実践がなされ、一つの運動となる。1921国際新教育連盟結成。日本には京都帝国大学教授の谷本富(たにもととめり)(1867-1946)が紹介。カリキュラムの近代化と教育方法における子どもの興味や自発性の尊重を説いた。大正期、1920代の教育現場での新しい理論や実践をうむ。千葉師範付属小、奈良女子高等師範付属小は新教育のメッカと目された。成城小、自由学園、文化学院、明星学園、池袋児童の村小学校など私立学校が誕生。鈴木三重吉、北原白秋、山本鼎ら芸術家たちも芸術教育を革新する運動に加わった。30年代軍国主義化のなかで弱められ、体制内部にとじこめられた。(中野光：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

そこで幼児教育に首を突っ込みました。お話しをしたら、是非来てください、ということだったので、たった4ヶ月でしたが、やりました。縁談がありまして、母などに4ヶ月で辞めさせられました。昭和11年頃は、女の方の職業でも女学校の先生とか、新聞社の婦人記者というのは、非常なインテリでした。ところが、保母さん、看護婦さんというのは労働者と見られていました。だから、縁談がもちあがったら、そんな暇つぶししている余裕はないだろう、と言って辞めさせられました。しかし、私は「なんとか、役に立つ仕事がしたい」という意欲だけはありました。

江里口 : 小石川保母伝習所で保母の免状をもらった後、すぐには勤めず、ウロウロしていました。それで、私は高良先生のご紹介で東京連合婦人会（理事長吉岡弥生、主事村上秀子<sup>20)</sup>）に勤めました。村上さんとの関係で市川房枝さん<sup>21)</sup>の選挙のお手伝いをしたこともあります。

立入 : 私は家庭科学研究所を出てから、お茶の水の文化学院<sup>22)</sup>文学部に行きました。

森安 : みんな、いろいろなことをやっているんですね。

立入 : この前、75周年の創立記念日でお招きを受けて、学校に行きまして、紅白まんじゅうをいただきました。

森安 : 石井柏亭さんとか、いろいろいらっしゃいましたね。

留美子 : 自由学園が大正10年ですよ。あの頃、新教育運動があったのですね。

鈴木 : そうですね。

立入 : 私はあれから、文化学院の文学部に入ったでしょう。文学部長が佐藤春夫先生<sup>23)</sup>で、源氏物語が与謝野晶子さん<sup>24)</sup>、技術史が岡邦雄<sup>25)</sup>、それから3年間は、哲学は2、3年が三木

---

<sup>20)</sup>1894-1967 (明治27-昭和42) 大正・昭和期の婦人運動家。東京連合婦人会に参加。1930吉岡弥生、大浜英子らが結成した婦人同志会で活動。1951-1963東京都議3期。(日本女性人名辞典, p.1026, 日本図書センター, 東京 [1993] による.)

<sup>21)</sup>1893-1981 (明治26-昭和56) 大正・昭和期の婦人運動家・政治家。愛知県生れ。1919友愛会に入り、労働婦人問題にとりくむ。同年末新婦人協会結成。1921渡米、婦人問題研究。帰国後、ILO 東京支局勤務。1924婦人参政権獲得期成同盟会結成。以後、婦人参政権獲得のため運動ひとすじ。1945新日本婦人同盟を組織。1953から5回参議院議員当選。(江刺昭子: 世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.)

<sup>22)</sup>1921西村伊作が創設。与謝野寛、晶子、石井柏亭、河崎なつらの協力を得た。「日本人として未来の文化的生活を営む素養を与える」ことを目的に掲げた。(中野光: 世界大百科事典, (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, 東京 [1998] による.)

<sup>23)</sup>1892-1964 (明治25-昭和39) 大正・昭和期の詩人、小説家、批評家、和歌山県生まれ。「スバル」系詩人。1919『田園の憂鬱』。1921『殉情詩集』。1926『佐藤春夫詩集』。

<sup>24)</sup>1878-1942 (明治11-昭和17) 明治・大正・昭和期の歌人、詩人。大阪府堺市生まれ。明星派。1901『みだれ髪』。1905反戦詩「君死にたまふこと勿れ」。1912『新訳源氏物語』。

<sup>25)</sup>1890-1971 (明治23-昭和46) 昭和期の科学史家。山形県生れ。日本における自然科学史と自然弁証法および技術論の諸領域の開拓者、啓蒙家。1916九大工学部助手、科学史家桑木アヤ雄に影響される。1924旧制一高助教(物理実験担当)。マルクス主義に傾き、科学史文献の翻訳、啓蒙的な唯物論的科学論発表。1932戸坂潤、三枝博音らと唯物論研究会創立に参加、事務長。1938執筆禁止、検挙。1940保釈出所。1944下獄。1945/10月出所。戦後「鎌倉アカデミア」(校長三枝博音)教授。産業教育研究連盟に参加。1935『唯物論と弁証法』、『自然弁証法』(共著)、1936『科学技術史』、グエレフスキー『近代技術史』翻訳、1948-1951『自然科学史』、1952-1953『科学の現代史』2巻、1955『新しい技術論』。(本多修郎: 科学史技術史事典, pp.135-136, 弘文堂, 東京 [1983] による.)

清<sup>26)</sup>，1年が谷川徹三<sup>27)</sup>，2，3年河上徹太郎<sup>28)</sup>，文芸が小林秀雄<sup>29)</sup>，それから英語が阿部知二<sup>30)</sup>でした。もったいないくらいの先生方でした。石田周三さん，西村伊作さん<sup>31)</sup>の娘さんもいました。奥村博史先生に教えていただいて，クラス・リングを作りました。

留美子：三木清の講義ってどうでしたか。

立入：もう，恥ずかしがってね。私たち，先生をからかって，「こっちを向いて」と言っても，絶対向かないんです。いたずらっ子ばかりですから。八木龍一さんという新婚ほやほやの先生が「1860年代のロシア」という題で文芸を講義をされます。すると，私たちは，「先生，ランデブー，鎌倉がいい？浜辺だったんでしょ？」などとからかったりしていました。皆，「先生」なんて呼ばないのです。阿部知二なら「阿部ちゃん」，校長先生は西村伊作だったから「伊作さん」と呼んでいました。戦争中，伊作さんが「紀元2600年なんて，あれはインチキだ，違う」と言うんです。私は伊作さんの7番目のお嬢さんと同じクラスで，しょっちゅう家に遊びに行っていました。警視庁の外事係が家まで調べに来ていました。私は築地小劇場が好きで，よく芝居に通っていました。すると，目黒の警察署から調べに来ました。そんな時代でした。

---

<sup>26)</sup>1897-1945 (明治30-昭和20) 大正・昭和期の哲学者。兵庫県生れ。戦前昭和期のもっとも輝かしい思想家の一人。1928羽仁五郎とともに雑誌『新興科学の旗の下(もと)に』創刊。30検挙投獄。ファシズム，軍国主義に抗し，「新しいヒューマニズム」主張。38-40昭和研究会に参加。45検挙投獄され，敗戦後間もなく，釈放を待たずに獄死。1926『パスカルに於ける人間の研究』，1927『人間学のマルクスの形態』。1932『歴史哲学』，『哲学的人間学』(草稿のみ)。1939・1946『構想力の論理』全2巻。遺稿『親鸞』(未完)。(荒川幾男：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

<sup>27)</sup>1895-1989 (明治28-平成元) 昭和期の哲学者。愛知県生れ。再刊『思想』編集。芸術論，文化論。宮沢賢治研究。

<sup>28)</sup>1902-1980 (明治35-昭和55) 昭和期の文芸評論家。長崎市生れ。純粹自我という批評原理を確立，近代批評の先駆者。雑誌『文学界』編集，芸術派。1932『自然と純粹』。1934シュエストフ『悲劇の哲学』翻訳。1954『私の詩と真実』。1959『日本のアウトサイダー』。1968『吉田松陰』。1977『歴史の発音(あしおと)』。(高橋 英夫：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

<sup>29)</sup>1902-1983 (明治35-昭和58) 昭和期の文芸評論家。東京生れ。1929雑誌『改造』懸賞評論『様々な意匠』で文壇デビュー。30/4から1年間『文芸春秋』に文芸時評連載。日本における本格的な近代批評創始。33林房雄，川端康成らと雑誌『文学界』創刊。35長編評伝『ドストエフスキの生活』の連載開始。プロレタリア文学崩壊後の文壇を主導。審美的。1946『無常といふ事』。『“罪と罰”についてII』(1948)『ゴッホの手紙』(1952)，1958『近代絵画』。1964『考へるヒント』，晩年『本居宣長』(1977)完成。(吉田 厩生：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

<sup>30)</sup>1903-1973 (明治36-昭和48) 昭和期の小説家，評論家，英文学者。岡山県生れ。知的抒情，ヒューマニズム。戦後は自由主義者として活躍。1930『日独対抗競技』，『主知的文学論』で文壇登場。36長編小説『冬の宿』，以後『幸福』，『北京』，『街』，『風雪』などを発表。1949『黒い影』，1959『日月の窓』など。英米文学の翻訳多数。(曾根博義：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

<sup>31)</sup>1884-1963 (明治17-昭和38) 大正・昭和期の教育家。和歌山県生れ。1921文化学院創設。校長として，個性尊重，男女平等をめざす自由主義的教育を実践。43不敬罪で検挙され，同9月学院閉鎖。46学院復興。文学，建築，美術などの個性的な教育で知られる。1960自伝『我』に益あり。(中野光：世界大百科事典，(c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha，東京 [1998] による。)

森安 : うるさかったですね。特高<sup>32)</sup>とかね。本でも、少し、そういうものを持っていると大変でしたね。

立入 : どういう人物かを調べにきたら、あんまり子どもなんでがっかりして帰っていきましかけれど。

森安 : 皆、書架にある本を裏返しにしてわからないようにしておいたりね。

立入 : 兄がその時分のソビエト婦人新聞とか、いろんな赤っぼい新聞や本を買ってくるのです。だから、一番最初に読んだ翻訳は女学校1年か2年、12、13才の時のクロボトキンの『革命家の思い出』という題のものでした。

留美子 : 与謝野晶子の講義はどんなものでしたか。

立入 : その時分はもうすでに心臓を悪くしておられました。着物を胸がはだけないかしら、と思うくらいにゾロツと着て、細々とした声で「源氏の君が・・・」と話されるので、皆で耳をすまして聞いていました。おかげで岩波文庫の与謝野晶子の源氏物語を全部読みました。

森安 : よく本を読んでいらっしゃるわね。

留美子 : 教養の塊になっていますね。

立入 : その時分の教養というと岩波文庫の本の翻訳を片っ端から読みました。ツルゲーネフ全部、トルストイ全部、ゴーゴリ全部って、本当に全部読みました。モーパッサンも全部読みました。戦争中はそういうものがだんだん無くなってきました。明治、大正文学全集っていうのを全部読みました。

留美子 : 今、教養というのはなくなりましたね。教養として本を読むという習慣が無くなりましたね。

森安 : 今は漫画ですものね。

立入 : ところで皆さん、ご結婚早かったですよ。

林 : 私は昭和20年です。

森安 : 私は昭和16年。

立入 : 私は昭和17年でした。

---

<sup>32)</sup>1911年8月21日設置、敗戦直後まで活動した社会運動、紛議、言論、思想取締りのための警察機構およびその構成員。正式名は特別高等警察。特高の組織運営はとくに強力な中央統制方式をとり、内務省が警視庁、各府県における課の設置、課長の人事を直接指示、スパイの使用などを伴う「視察内偵」実施、各種取締法違反や不敬罪容疑の名目で、多くの人々を検挙。共産主義者、アナーキスト、左翼社会民主主義者に対しては特に厳しい取り調べを行なった。小林多喜二、野呂栄太郎などの死者もあった。労働運動、農民運動、無産政党運動、水平運動、プロレタリア文化運動、学生運動、借家人運動、消費組合運動、俸給生活者運動、婦人解放運動や在日朝鮮人の民族解放運動、労働争議、新興宗教、中小商工業者運動などの「視察内偵」や取締りも担当。日中戦争開始後は、取締りを徹底。戦局が悪化すると情勢一般の「視察内偵」、強制連行された朝鮮人の動向の監視を重要任務とし、一般国民の不満、在日朝鮮人の運動などの抑圧につとめた。1945年10月4日GHQ覚書で、13日までに解体、係員は一斉に罷免。(吉見義明:世界大百科事典,(c)1998 Hitachi Digital Heibonsha,東京[1998]による.)

立入 : 皆さんは坂本眞琴(青踏社同人)さんのコスモス・パーティに入らなかった?

江里口 : 入りました。1回行きました。

立入 : その頃には珍しく、坂本眞琴さんが禁酒同盟で各大学にある禁酒会に呼びかけて、コスモス・パーティという男女交際のクラブを作られて、私たちも出たわよね。慶応とか、東大とか、早稲田とか、青山学院大とかのいろいろな人たちが集まって、毎月当番を決めて会をして、その記録をつくって、平塚らいてうさんとか、いろんな方を必ずゲストに呼んでお話しをしていただきました。気候のいいときにはハイキングもしました。ずいぶん続きましたよ。私は文化学院に行っても行っていました。戦争中もやっていましたが、学生たちが海軍や陸軍に兵隊に行くことになって止めになりました。皆、大学を出ておられたから、普通の兵隊よりは上に任官されて出て行かれました。

留美子 : それは学徒動員のことですね。戦争中は皆さん、良妻賢母を一応やっていたのですか。

林 : 戦争中は食べることだけに無我夢中でしたね。

森安 : 疎開したりねえ。

林 : 私は女学校を4年で終えてから母の勧めで1年裁縫をやったでしょう。それが疎開で役に立ちました。百姓はできませんでした。しかし、ともかくお米をお金で買わなければなりません。ヤミはいやなので、「何かお手伝いをさせてください」と言いました。すると、「奥さん、縫い物してくれるかね」、「縫い物なら少しはね」ということでやりました。終戦になったら、戦地から兵士が帰ってきて、皆、嫁入り騒ぎが起きました。それで、手織りの紬で、古い紅絹の裏を洗い張りしたので、格好をつけて、着物を縫いました。それなどを曲がりなりに仕立てることができたので、そのお礼がお米で来ました。

皆 : ワアー、良かったですね。

林 : これは1年裁縫をやっておいてよかったなあと思いました。農家の人たちはなかなか着物を買えません。しかし、自分のところで紬を織っていました。それを何枚でも何枚でも仕立てました。そうすると、こちらはお米をいただけるのが嬉しいものだから、長い帯とか、銘仙の羽織とかを付けて、格好良くしてあげました。それがまた、お米になりました。自分で働く農村は強かったですね。

留美子 : 家庭科学研究所の時の教育は今も生きていますか。

森安 : そうです、そうです。私はモザイクね。

留美子 : このお部屋にあるああいう織物、モザイクはいつ頃ですか。

森安 : それらは戦後です。子どもたちが大きくなってからです。美術学校に入りたかったけれど、昔は、「そんなこと、とんでもない」と言われました。絵描きなんか、なるものではない、という時代でした。

ここに飾ってある織物、モザイク、夢二の絵の額装などは全部自分で作りました。

林 : 森安さんは家庭科学研究所で種をまいていただいたのを皆開花させたんですね。



立入 : 標準本を読むのが楽しみで、主人が亡くなって20年以上経ちますが、今も一人でいても全然寂しくないのは本があるからです。

留美子 : 最近、目白の下落合に住んでいます。家を引っ越していったり、マンションが建ったりすると、ガレージなどで、「この本、どうぞ」などと言って、古い文庫本が出ていたりします。私は、結構回っています。「さすが」というような教養本がいっぱいありますね。

森安 : そういうのは売れないのですね。

留美子 : 売るにも売れませんが、結構、皆さん読んだんだなあ、と思います。

立入 : 私は今や翻訳ミステリー専門で読んでいます。未だに映画が好きで、毎週見えています。ビデオでは見ません。映画は映画館で見るものだ、と思って。お芝居も大好きで、毎月歌舞伎に行っています。

森安 : 自分の好きな生き方をするって良いですよ。

真木 : 生きていく上での栄養みたいなものが昔はあったわけですね。

立入 : 楽しみかたを知らないと、年取ってから楽しもうと思っても手遅れですよ。いい青春を送った人はいい老後を送っていると思います。

皆 : ええ、そうですね。

林 : 80才過ぎまで生きていると、村岡花子さんのお孫さんとお付き合いすることになります。

森安 : それはそうですね。皆そのくらいになってしまいますよね。

林 : 村岡花子先生のお嬢さんが大森にいらっしゃいます。書斎を開放して、「赤毛のアン」の記念館を作られました。とてもさわやかな方でした。私どもも呼ばれて行きました。そのお嬢さんは先日60才台で亡くなられました。今は結婚なさった方と、独身の方と、20才台のお嬢さん(村岡花子の孫)が二人でそこをマンションに直して、一番下に昔の面影を残した建物をはめ込んで、去年か一昨年かに、オープンさせたのです。その時に呼んでいただきました。そのお嬢さん方と村岡先生のことについて一緒にお話しをしました。お孫さんとお付き合いなんて本当に楽しいですよ。

森安 : まだ、皆いろんなところで続いているんですよ。

鈴木 : こうしてうかがっていると、みなさまが家庭科学研究所で過ごした日々と高良とみ先生とのご縁を本当に大切になさって来られたことがよくわかります。お話はまだまだ尽きませんが、この辺で聞き取りを終わりたいと思います。今日は長時間にわたり、貴重なお話をありがとうございました。

留美子 : 私は皆さんが母によく親しくしてくださっているということはわかっていましたけれど、今日初めて詳細なところをうかがって驚いています。

林 : 脳みそが若返りましたよ。